

クリスマスの起源

—その歴史的背景—

村上良夫*

The Origin of Christmas

—Its Historical Background—

Yoshio Murakami

Received October 21, 1988

I はじめに

クリスマスは今日、周知のように12月25日に祝われている⁽¹⁾。しかし、キリスト誕生の実際の月日は不明である。キリストに関する資料とも言うべき四福音書は、キリストが生まれた月にも日にも触れてはいない。キリストの誕生日については、信頼するに足る何の記録も残っていないのである⁽²⁾。

となると、当然、疑問が起きてくる。いったい、いつ、どこで、なぜ、12月25日がキリスト誕生の日として祝われるようになったのか。本稿はこれを扱うものである⁽³⁾。これらのいきさつについては、すでによく知られているかと思われ、改めて論じるまでもないかもしれないが、しかし正面から総合的に考察したものは、余りないように見受けられる。あえて取り上げるゆえんである。クリスマスという、現代の日本でもきわめて一般的になっている行事が、実はどのような歴史的背景のもとで成立したものなのか。いわば、クリスマスという“窓”を通して、古代の西欧世界のありさまを垣間見たいと思うのである。

なお、手順として、いつ、どこで始まったか、つまり、時と場所の確定をまず扱い、次に、なぜ始まったか、つまり、キリスト生誕を祝うようになったことの背景を考察する。そして最後に、なぜ12月25日になったのかを検討することにした。

II いつ どこで 始まったか

キリスト誕生の月日については、何の記録も史料もないため、初期のキリスト教徒たちの中には、さまざまに憶測をめぐらす者たちがいたらしい⁽⁵⁾。

*教養部

Faculty of General Education

たとえば、2世紀の終り頃、アレクサンドリアのクレメンス [c. 150~c. 215] は、キリスト生誕の日付に関する種々の意見を挙げている。

「われらの主がお生まれになった年のみならず、日をも断定した人たちがいる。彼らは、それはアウグストゥス帝の第28年、Pachonの第25日 [5月20日] のことであると言う。……さらにまた、主はPharmuthの第24日か25日 [4月19日か20日] にお生まれになった、という人たちもいる。……」

そしてクレメンス自身は、キリストの生誕は紀元前3年11月17日のことであろうと考えるのである。⁽⁶⁾

これはほんの一例にすぎない。⁽⁷⁾ スイスの新約学者オスカー・クルマンの指摘するとおり、⁽⁸⁾ キリスト教の初期には、キリスト誕生の日を確定しようとする試みが自由に行われていたようであるが、教会側はそんなことには無頓着で、別段なんの措置も講じようとはしなかったようである。つまり、好奇心の強い、あるいは細かなことを気にする一部の信徒たちは、あれこれ勝手に決めたりしており、一方、教会当局は、そんなことはどうでもいいことだとして放っておいたと思われる。

さて、それではいったいつ、12月25日がキリスト生誕の日として登場してくるのか。現在のところ最古の記録は、ローマで336年に作成された、いわゆる『フィロカルスの暦』である。⁽⁹⁾ そこにははっきりと

「12月25日。キリスト、ユダヤのベツレヘムに生誕」⁽¹⁰⁾

と記されており、これが今のところ、ローマで12月25日がキリスト誕生の祝日とされていた最古の証拠とされている。⁽¹¹⁾ いろいろな意見のあったキリスト誕生の日付が、いつのまにか、12月25日と決められ、ローマで祝われるようになっていく。こうして、史料の示すところでは、12月25日のクリスマスは、ローマにおいて、すでに336年頃から祝われていた。すなわち、クリスマスは、4世紀の初め、ローマで始まった、と見るのが、現在の一応の通説であり、⁽¹²⁾ われわれもこれに従ってよいと思われる。

4世紀の初めとは、キリスト教に対するローマ帝国の“迫害”が最高潮に達した後、コンスタンティヌス帝 [在位306~337] の〈ミラノ勅令〉(313年)によって迫害が終息し、公認されるようになる劇的な時期である。このことを記憶に留めた上で、次にキリスト誕生の日付には無関心だった教会が、なぜキリスト誕生を祝うようになったのか、その理由を考えてみたい。

Ⅲ なぜ始まったか

ローマのキリスト教徒たちは、なぜキリストの誕生日を祝うようになったのか、その背景を、いくつかの側面から考察してみよう。

(1) 社会的背景

ローマ帝国において、為政者や他のきわだった人物たちの誕生日を祝うことは、一般の慣例であり、そうした行事は、当の人物の死後もしばしば、公に行われていた。⁽¹³⁾ こうした慣習に対し、オリゲネス [c. 185~c. 254] などは、

「誕生日が義人によって守られたというような聖句は見当たらない」と言って、⁽¹⁴⁾ どのようなも

のであれ誕生日を祝うことに反対したが、しかし、初期のキリスト教徒たちが、異教徒がローマ皇帝にささげる称号（「主」）のみならず他のさまざまな誉れをもキリストに帰したいと考え、救い主の誕生をこそ祝いたいと感じるようになっていったであろうことは、容易に想像できる。⁽¹⁵⁾ 異教徒たちは皇帝を「主にして神（dominus et deus）」と呼び、⁽¹⁶⁾ また大功あった將軍たちを「救い主（sōter）」と讃えている。⁽¹⁷⁾ しかしキリストこそ、まことの「主にして神」なるおかた、まことの「救い主」なるおかたではないか、異教徒らが皇帝の誕生日を祝うのなら、われわれはキリストの誕生日を祝うべきではないか、と、キリスト教徒たちが考えるようになったとしても不思議はない。この傾向は、コンスタンティヌス帝がキリスト教を公認して以降、ますます強くなっていったであろうと推測できる。

（2）信仰的背景

英国の教会史家・典礼学者グレゴリー・ディクスは、名著『典礼の形（The Shape of the Liturgy）』（1945）の中で、こう述べる。キリスト教が認められ、教会が自由を獲得したあと、「キリスト教徒たちの、礼拜に対する態度は、それと気づかぬうちに、変化せざるを得なかった」。「教会は、この世で居心地良く感じるようになるにつれて、時と和合するようになっていった」⁽¹⁸⁾と。

これは鋭い指摘だと言わねばならない。つまり、迫害を受けて危機感切迫感のまっただ中にいたのが、一転して公認の宗教となり、ほっと安堵の息をつく。すると今度は、いつのまにか、終末的危機意識は薄れるようになり、落ち着いて歴史全体の流れを振り返ることができるようになっていく。終末の切迫、キリスト再臨の待望という、間近に思われる出来事に目をこらすことから、今度は、前（近未来）だけでなく、横（現在）にも、後ろ（過去）にも、目配りするようになっていく。「救済の歴史的過程」⁽¹⁹⁾（G. ディクス）を意識するようになっていくのである。

初代教会においては、とディクスは言う、「最初の典礼のサイクルは、きわめて単純なものであった。まだ典礼の材料となるものに乏しかったということだけでなく、典礼に関する初期の終末論的理解を反映していたからである。すなわち、そこには事実上、歴史的な何かを記念するという余地などなかったのである」⁽²⁰⁾だが、変化が生じてくる。終末論から歴史へ。終末的非日常的切迫感から、日常世界への適応へ。この変化の中で、過去の歴史的出来事が、自分たちの拠って立つ“救済史”のひとこまとして、大きな意味を持つようになってくる。終末的期待は超歴史的な、絶対的なものであるが、世界が教会にとって居心地良くなると終末待望は背後にしりぞき、代わって教会は自らを現実の歴史の中で相対化し、客観視するようになっていく。「終末論」が、「歴史」に道を譲っていくのである。そして、クリスマスこそ、典礼の中で記念され祝われるようになったキリストの地上生涯の出来事の中の、重要なひとこまであった、とディクスは述べる。⁽²¹⁾ この見方は妥当であろう。初期のキリスト教徒たちの意識の変化——再臨のキリストを待望するという“終末論”から、歴史の中のキリストの出来事を記念し祝賀するという“歴史”への移行——、信仰内容の重心の移動という信仰的背景が、彼らがクリスマスを祝うようになった大きな一因であったと考えられるのである。ドイツの教会史家エルンスト・ベンツは、もっとはっきり断言する。すなわち、イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスは、「キリストの間近な再臨に対する期待が薄れていくのに伴って、確立定着していった」⁽²²⁾

と。

(3) 神学的背景

クリスマスが始まり、急速に広まっていった要因の一つに、当時の神学的教理的背景ということが挙げられる。

当時の神学的教理的背景とは何か。簡単に言えば、当時、ローマを中心とするいわゆる西方教会は、二つの問題に直面していた。一つは、キリストの神性を否定する「アリウス主義」の異端であり、この中には、いわゆる“養子論”も含まれていた⁽²³⁾。“養子論”とは、キリストはもともと被造物（人間）であったが、バプテスマの時に神の霊（もしくは霊力）を受けて神的存在となった、とする見解である。これがキリストの本来的な神性を否定する、危険な異端説とされたことは言うまでもない。もう一つは、イエスの誕生とバプテスマを、共に1月6日に祝い、いわゆる「エピファニー（主顕祭、顕現祭、公現祭）」という典礼行事で、これは東方教会の多くが守っていたものであった⁽²⁴⁾。しかしこれは、キリストのバプテスマを祝うという側面が強く、しかも東方教会を中心とする典礼行事であることから、ローマの教会にとってはむしろ目障りなものと言えた。

さて、そこでこの二つの問題を考慮に入れるなら、クリスマスをはっきりと（12月25日に）定めたということの中に、教理的な思惑も働いていたであろうということは、想像に難くない。「アリウス主義は、325年のニカイア会議においてははっきりと断罪される。そして〔クリスマスという〕この祝祭日がローマに登場してきたのは、まさにこの時期であった」⁽²⁵⁾（C. スミス）。キリストの神性を否定するアリウス主義が公に断罪されるのと時を同じくして、神の子キリストの誕生を祝うクリスマスが表舞台に出てくる。この間の事情を、クルマンはこう説明する——「〔ニカイア会議において〕教会は、イエスの誕生において神ご自身が受肉されたのではないとする教理——イエスはバプテスマの時に神の子とされたとする説も含めて——を、誤りであると明確に宣言した。この決定に際しては、ローマの教会が非常に重要な役割を演じたのであった。これらの論争が、日付の問題は別として……誕生日の祝いを広めていくのにどんなに有利に働いたか、また一方、誕生の祝いをバプテスマの祝いと結びつけること〔すなわち『エピファニー』〕が、……神学的にはどんなに好ましくないものと感じられたかは、容易に理解できる。……従って、降誕祭を主顕祭と切り離そうとする動きは、キリスト論的思索の結果として説明されなければならない」⁽²⁶⁾。

要するに、こういうことである。キリストの神性を否定するアリウス主義の異端がいて、その中では、キリストはバプテスマの時に初めて神の霊力を受けたと説く“養子論”も有力な一派であった。他方、東方の教会には、「エピファニー」という、キリストの誕生とバプテスマとを祝う祭があり、これはキリストのバプテスマを強調するものであったために、“養子論”を助長しやすいという恐れがあった。こうしたキリスト論に関する異端の危険を排除するためには、キリストの誕生日を公に祝うことによって、キリストは（バプテスマの時からではなく）最初から神であられた、受肉された神であられたと教えることが必要だと、ローマの教会は考えたのではないか。そして、誕生とバプテスマという二重の性格を持ったエピファニーでなくて、誕生のみを祝うクリスマスを、強力に前面に押し出し、喧伝することになる。（そこには東方教会に対する対抗意識も働いていたであろうが）。いずれにせよクリスマスの始まり（並び

にその普及あるいは強要)には、このような神学的教理的背景もあったと推測できるのである。⁶⁷⁾

IV なぜ12月25日になったか

クリスマスが祝われるようになった背景について、そのいくつかの要因を見てきたが、それでは、なぜそれが12月25日になったのか。イエスが生まれた日付に関しては、聖書をはじめ他の史料にも何の言及もなく、従って各人があれこれ勝手に憶説を唱えていたのが、なぜ12月25日という特定の日に定められたのか。

(1) いくつかの理由づけ

ローマのキリスト教徒たちは、なぜ12月25日をキリスト誕生の日として祝うようになったのか。⁶⁸⁾これについてはすでにいくつかの説明がなされてきた。

まず、福音書の記事をいろいろと操作して、実際に12月25日がキリスト誕生の日だと結論づける見方がある(クリュソストモス [c. 347~407] など)⁶⁹⁾。これはつまり、特に『ルカによる福音書』1章の記事に牽強^{けん}付会の解釈を施し、ザカリヤは大祭司であり、彼が聖所にはいって香をたいたのは「贖いの日」であったとし、マリヤがイエスをみごもったのはそれから半年後(ルカ1:26)、すなわち3月末であるとし、従って誕生は12月末であるとするわけである。しかしそもそも、ザカリヤが大祭司であったなどとどこにも書いてないし、まして香をたくのは聖所であって、「贖いの日」にのみ大祭司がはいる至聖所ではない。これは全く根拠のない強引な論法であって、明らかに、クリスマスが12月25日に定められたあと、それを福音書から証明せんがために考え出された説明であろうと推測されている。何か別の理由で選ばれた12月25日という日付を、なんとか聖書的に根拠づけようとした苦肉の策であったろうと考えられるのである。⁶⁹⁾従ってこの説明は、現在全く支持されていない。⁶¹⁾

一方、太陽の運行に基づく説明もある。⁶²⁾これは、かなり古くからの伝承に従って、キリストが十字架上で死なれたのは3月25日(すなわち“春分”)であるとし、⁶³⁾もしそうであるなら、キリストの地上生涯は完全なものであったはずだから、キリストがマリアの胎内に宿られたのも同じ日のはずだ、つまり、キリストが地上におられた年数はきちんと完全な数であって、端数などはないはずだから、と考えるのである。そして、マリアの受胎がその3月25日であるなら、キリストの誕生はちょうど9カ月後の12月25日であったに違いない、と結論するのである。⁶⁴⁾12月25日が、このような「天文学的また象徴的推論から」決定されたのではないかと、とする見方は、フランスの著名な教会史家ルイ・デュシェーヌによって提示されたが、現在は、全然擁護者がいないとまでは言えないにしても、⁶⁵⁾ほとんど支持されていないのが実状である。⁶⁶⁾そうしたことに触れている当時の史料が、全く見当たらないからである。ゆえに仮説としては興味深い、それを裏付ける証拠が見つからない以上、結局一つの推測にとどまらざるをえない。

(2) 太陽神崇拝の影響⁶⁷⁾

さて、12月25日がキリストの誕生日として選ばれたことについて、現在最も有力な説明は、それが当時の太陽神崇拝の影響によるものであるとする見方である。オーストリアの典礼学者ヨーゼフ・A・ユングマンは、端的にこう述べる、「12月25日が選ばれた実際の理由は、それが

当時きわめて盛大に祝われたdies natalis Solis Invicti [不敗太陽神の生誕日] という、異教の祝祭日であったからである³⁹と。

これはどういうことであろうか。つまり、当時のローマ帝国には、太陽神崇拜が広く行き渡っていた。これを本格的に導入したのは、皇帝アウレリアヌス [在位270~275] であって、彼が274年にパルミユラとの戦いに勝利を取めた後、太陽神礼拝をローマにもたらしたのである³⁹。彼の目的としたところは、帝国の恒久的統一ということであり、不敗太陽神の祭儀の確立は、彼の努力のいわば頂点をなすものであった⁴⁰。太陽神は、帝国の主神すなわち国家神として公認されたわけである。そして、伝統的に“冬至”の日であった12月25日は、《不敗太陽神生誕日》となり、国家の行事の中でも最大の祝日とされた⁴¹。太陽神崇拜が、いかに急速に全ローマ帝国内に普及し受け入れられたかは、太陽神が美術に描かれ、また特に貨幣に刻まれるようになったことから推測できる⁴²。

太陽神崇拜がこのようにいわば帝国の中心的な国家宗教となる以前から、すでに帝国内にはミトラス教という一種の太陽崇拜とも言える密儀宗教が浸透し⁴³、隆盛を誇っていたが（そしてアウレリアヌス帝による太陽神祭儀の導入も、これを吸収し踏まえるという側面を持っていたのであるが）、このミトラス教の主要な祭日も同じく12月25日であった⁴⁴。

かくて、クルマンの言うとおりに、「異教世界においては、12月25日は太陽神のための特別に重要な日として祝われていた。そしてコンスタンティヌス大帝は、太陽崇拜をキリスト礼拝と結びつけるために、深慮遠謀のうちにことを運んだ⁴⁵」。米国の教会史家ロバート・グラントもこれに同意する。「この祝い [12月25日をキリストの誕生日とすること] が、異教の祝祭とキリスト教の祝祭とを結びつけようというコンスタンティヌスの関心によるものであったことは、ほぼ確実である⁴⁶」。

太陽神崇拜とキリスト礼拝を結びつけることが、コンスタンティヌス帝の意図したところであったにしても、なぜそれが可能だったのか。一つの大きな要素は、太陽それ自体が、キリスト教ではキリストを表す象徴の一つとして用いられたからであった⁴⁷。事実、教父たちはしばしば、『マラキ書』4章2節の「義の太陽」という聖句を引用しつつ、キリストは義の太陽であると強調している。時代はやや下るが、キリストこそ真の太陽であり、キリストが生まれた日はまさしく太陽の日であると説くアンブロシウス [334-397] の説教の一節を、参考までに引いておこう：「われらの主がお生まれになったこの聖なる日を、キリスト教徒は新しい太陽の日と呼んでいるが、それは適切なことである。彼らがあくまでもそう主張しつづけるものだから、ユダヤ教徒や異教徒たちさえ彼らに同意して、この日をそう呼んでいる。われわれは喜んでこの見方を受け入れ支持するものである。なぜなら、救い主の夜明け [到来] と共に、人類の救いが更新されただけでなく、太陽の輝きもまた新たなものとされたからである。……というのは、キリストが苦しみを受けられた時太陽がその光を失ったというのなら、キリストがお生まれになった時には太陽はそれまでになかったほどの光を持って輝いたに違いないからである⁴⁸」。

しかし、このようにキリストを太陽や光と結びつけて強調しているということ自体、12月25日をキリストの誕生日としたのは、この日が太陽崇拜の重要な日だということを知った上でのことだったということ、よく示しているように思われる。太陽神礼拝の中心的な祝祭日であると十分知っていたからこそ、この日をキリスト誕生日とすることにあたって、あえてキリストを「義の太陽」とか「異邦人を照らす啓示の光」（ルカ2：32）であると、当時の教会人たちは強

調せざるをえなかったのであろう。⁶¹⁾

こうして、ベルギーの宗教史家キュモンの評するごとく、「キリスト降誕の祝祭が12月25日に定められたのは、それが、不敗神の復活すなわちNatalis invictiが祝われる冬至にあっていたからであるということは、⁶²⁾ 確実であろう」。

ここで、もう一つ疑問が生じる。教会は、それが太陽崇拝の特別な祝日と知っていて、なぜ、わざわざこの日を選んだのか。その真の動機は何であったか、という点である。

ヴァイザーはこれを、伝道的見地から理解しようとする。すなわち、ローマの教会が12月25日を選んだのは、「明らかに、人々を物理的太陽から引き離して、主キリストをあがめるようにさせるため」であったろうと考えるのである。⁶³⁾ 確かに、迫害を乗り越えて、今や勝利者となったキリスト教会が、異教に対抗し異教を阻止するために、そして異教徒たちをキリストへと導くために、あえてこの日を選んだということもあるかもしれない。しかし、別の理由もあったのではないか。

それは、政治的社会的配慮ということである。⁶⁴⁾ 長期にわたる迫害をしのいで、今ようやく合法的宗教とされるようになったキリスト教が、皇帝のお膝元であり大帝国の中心であるローマにおいて、皇帝の政策に顧慮を払い、社会に合わせるほうが賢明だと感じたとしても、きわめて当然のことであろう。コンスタンティヌスは、帝国統一のために、太陽崇拝とキリスト教を結びつけようとした。⁶⁵⁾ 一方、終末待望感の弱まりつつあった教会側は、この世において影響力ある立場を得て異教徒をも引きつけたいと考えるようになった。こうして、12月25日のクリスマスは、帝国側の必要と教会側の必要とのいわば“接点”となったと言える。前者は帝国の統一という必要から、そして後者は社会への適応という必要から。教会側のそうしたやり方に、異教徒の教化・伝道という積極的側面を見るか、それとも国家政策への歩み寄りという妥協的側面を見るか。おそらくは両方とも含まれていたのではあるまいか。

V お わ り に

ローマ帝国においては、太陽神崇拝が広く行われていた。アウレリアヌス帝はこれを国家の宗教と定め(274年)、かくて12月25日(冬至)には、“不敗太陽神”のための盛大な祭儀が催された(ミトラス教の大祭もこの日であった)。そしてコンスタンティヌス帝[在位306~337]は、帝国統合のために積極的に太陽崇拝を推し進めた。

他方、教会は、神学的また社会的背景から、キリスト降誕祭を定める必要に迫られていた。終末意識の退潮もこれに拍車をかけた。(というより、この信仰意識の変化が、そもそもの根底にあったのかもしれない。)そして、皇帝の推し進める太陽崇拝を柱とする宗教政策の影響は、教会自体にも強く及んでいた。

このようにして、終末感の希薄化、貴人の誕生日祝賀という社会的習慣、そして特に、太陽神礼拝との結合という政治的要請——こういった信仰的・社会的・政治的背景から、そしてまた、キリストの神性を強調するためにバプテスマではなく生誕を祝おうという神学的教理的背景、更に、一般に広く祝われていた太陽神生誕の祝祭日を、まことの太陽なるキリストの生誕日とすることによって異教徒を引きつけやすくしようといういわば伝道的背景から、12月25日

がキリストの生誕日、いわゆるクリスマスとして定められたのであった。時はおそらく4世紀初頭、所はローマと考えられている。

現在、世界中に広く普及しているクリスマス、仏教国と言えぬわが国でも年末の一大行事となっているクリスマスは、実はこのような、さまざまな背景、さまざまな思惑のもとに生み出されてきたものであった。

注

- (1) 例外として、ソ連邦内のアルメニア教会は1月6日にキリストの生誕を祝っている。Oscar Cullman, *The Early Church: Studies in Early Christian History and Theology*, ed. A.J.B. Higgins (Philadelphia: Westminster Press, 1956), pp.33—34や, Anselm Strittmatter, "Christmas and Epiphany: Origins and Antecedents," *Thought* 17 (December 1942) :606, 等参照。
- (2) C.Smith, "Christmas and Its Cycle," *New Catholic Encyclopedia* (N.Y.: McGraw-Hill Book Co., 1967), 3:656; Cullman, p.21.
- (3) ベルギーの典礼学者ベルナル・ボットも指摘するとおり(Bernard Botte, *Les Origines de la Noel et de l'Epiphanie: Etude Historique* [Louvain: Abbaye du Mont Cesar, 1932], p.6), クリスマスの歴史はエピファニーの歴史と切り離すことができない。しかし本稿では、一応12月25日のクリスマスに範囲を限定して考えることにしたい。
- (4) たとえば Roland H. Bainton, *Christendom: A Short History of Christianity and Its Impact on Western Civilization*, Vol.1 (N.Y.: Harper & Row, 1966), pp.76~77 等参照。
- (5) Cullman, p.21.
- (6) Clement of Alexandria, *The Stromata*, Book 1, Chapter XXI (*Ante-Nicene Fathers*, II 333). ここで注目すべきは、12月25日という日付のなんの形跡も見いだせないことである (Kirsopp Lake, "Christmas", *Encyclopaedia of Religion and Ethics* [N.Y.: Charles Scribner's Sons, 1913]3:605, 参照)。
- (7) Cullmann, pp.21—23参照。
- (8) *Ibid.*, p.23.
- (9) L.Duchesne, *Christian Worship: Its Origin and Evolution. A Study of the Latin Liturgy up to the Time of Charlemagne*, tr.M.L.McClure, 5th ed. (London: Society for Promoting Christian Knowledge, 1927), p.258. Lake, p.602, Strittmatter, pp.609—611, Cullmann, p.29をも参照。
- (10) Ed. Mommsen, *Monumenta Germaniae Historica*, Auctorum Antiquissimorum, t.ix, vol.i, Berolini 1892, p.71 (quoted in Strittmatter p.610他)。
- (11) J.A.Jungmann, *Public Worship*, tr. Clifford Howell (London: Challoner Publications, 1957), p.207
- (12) Botte, pp.33—34. A.Allan McArthur, *The Evolution of the Christian Year* (London: SCM Press Ltd., 1953) p.43; J.A.Jungmann, *The Early Liturgy; To the Time of Gregory the Great*, tr. Francis A.Brunner (Ind.: University of Notre Dame Press, 1959), p.149など参照。こうしてローマに始まった12月25日のクリスマスは、ローマの教会の積極的な働きかけによって各地に広められ、380年代にはすでに北アフリカ、北イタリア、スペインにも及び、また東方にも広がっていった (Jungmann, *Worship*, p.207; Cullmann pp.32—34; Smith, p.656; McArthur, pp.44—51等参照)。
- (13) Francis X.Weiser, *Handbook of Christian Feasts and Customs: The Year of the Lord in Liturgy and Folklore*, Abridged ed. (N.Y.: Paulist Press, Deus Books, 1963), p.59. Jungmann, *Worship*, p.205をも参照。
- (14) Origen, *Commentary on Matthew*, X, 22 (*ANF*, X, 428, 429).
- (15) Weiser, p.59.

- (16) 秀村欣二「ローマ皇帝支配の意識構造」(『岩波講座・世界歴史3』岩波書店, 1970年) 59頁。新田一郎『キリスト教とローマ皇帝』(教育社, 1980年) 62頁以下。
- (17) 弓削 達『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』(日本基督教団出版局, 1984年) 270-272頁。
- (18) Gregory Dix, *The Shape of the Liturgy* (London: Dacre Press, Adam & Charles Black, 1945; repr., 1960), p.305.
- (19) *Ibid.*
- (20) *Ibid.*, p.335.
- (21) *Ibid.*, p.357.
- (22) Ernst W. Benz, "Christianity", *New Encyclopaedia Britannica* (Chicago: Encyclopaedia Britannica, Inc., 1975), Macropaedia 4:499.
- (23) George M. Gibson, *The Story of the Christian Year* (N.Y.: Abingdon-Cokesbury Press, n.d.), p.87.
- (24) Cullmann, pp.24-25.
- (25) Smith, p.656.
- (26) Cullmann, p.30.なおBotte, p.86をも参照。
- (27) このことを念頭に置くなら、「反アリウス主義の偉大な東方教父たち(カッパドキア教父たちとヨアネス・クリュソストモス)が、東方教会がクリスマスを受け入れるに際してきわめて影響が大きかったように思われる」(Smith, p.656)ということも、よく理解できる。
- (28) Strittmatter, p.611.
- (29) Lake, p.607.
- (30) *Ibid.*
- (31) Smith, p.656.
- (32) Duchesne, pp.263-265.
- (33) キリストの死は3月25日のことであると最初に述べたのはテルトゥリアヌス (*Adversus Judaeos*, 207年頃) だと、デュシェーヌは言う (*Ibid.*, p.262).
- (34) *Ibid.*, p.263.
- (35) H.Engberding, "Der 25. Dezember als Tag der Feier der Geburt des Herrn," *Arch, Liturgwiss.* 2 (1952) : 25-43, など。
- (36) Strittmatter, pp.611-612; Smith, p.656; Jungmann, *Liturgy*, p.147.など参照。
- (37) この項は, Samuele Bacchiocchi, "Un Esame dei testi biblici e patristici dei primi quattro secoli allo scopo d'accertare il tempo e le cause del sorgere della domenica come giorno del Signore" (Ph.D.dissertation, Pontifical Gregorian University, 1974), pp.405-414に負うところ大である。
- (38) Jungmann, *Liturgy*, P.147
- (39) *Ibid.*, p.148;秀村, 75頁等参照。
- (40) Gaston H.Halsberghe, *The Cult of Sol Invictus* (Leiden: E.J.Brill, 1972), pp.134-135.
- (41) *Ibid.*, pp.138-142, 144; Strittmatter, pp.612-613; Jungmann, *Liturgy*, p.148.
- (42) Strittmatter, p.613.
- (43) 太陽神(ソル)とミトラス神の関係は明確ではない。両者が同一視されている場合が多いが、密接に結びついたしかし別箇の存在として表されていることもしばしばである。M.J.Vermaseren, *Mithras, The Secret God* (1963), 邦訳, M. J. フェルマースレン, 小川英雄訳『ミトラス教』(山本書店, 1973年) 107-111頁等参照。
- (44) Cullmann p.30; Franz Cumont, *The Mysteries of Mithra*, tr. Thomas J.M.Cormack, 2nd ed. (Chicago: Open Court Publishing Co., 1910), p.167. 実際, 「12月25日は新しい光の到来と神の生誕が祝われる, ミトラス神の特別な祭日であった」(フェルマースレン, 87頁)。
- (45) Cullmann, p.29.

- (46) Robert M. Grant, *Augustus to Costantine: The Thrust of the Christian Movement into the Roman World* (N.Y.: Harper & Row, 1970), p.308.
- (47) Cullmann, p.31.
- (48) Botte, pp.63-65.
- (49) Ambrose, Sermon VI, (Migne, *P.L.* 17, 614. Cullmann, p.36より引用).
- (50) Cullmann, p.31.
- (51) ここではくわしく立ち入ることはできないが、こうした太陽崇拝に教会を適合させていくということは、日曜日（太陽の日）がキリスト（義の太陽）の復活日として、従来の安息日（土曜日）に代わって重要な日とされていったことと軌を一にしている。最初の「日曜休業令」（321年）を出したのがコンスタンティヌス帝であることは周知のとおりである：「コンスタンティヌスからエルピディウスへ。すべての裁判官、市民および職人は、尊ぶべき太陽の日には休息すべきである。……」（ヘンリー・ベッテンソン編、島田福安訳『キリスト教文書資料集』[聖書図書刊行会、1962年]、44頁）。これらの問題を論じたものとして、次の3冊を挙げておきたい；S.Bacchiocchi, *From Sabbath to Sunday: A Historical Investigation of the Rise of Sunday Observance in Early Christianity* (Rome: Pontifical Gregorian University Press, 1977); D.A.Carson, ed. *From Sabbath to Lord's Day: A Biblical, Historical and Theological Investigation* (Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1982); K.A.Strand, ed. *The Sabbath in Scripture and History* (Washington, D.C.: Review & Herald Publishing Association, 1982).
- (52) Cumont, p.196.なおHalsberghe, p.174をも参照。
- (53) Weiser, p.60. Gibson, p.87も参照。
- (54) Cullmann, p.32; Grant, p.309.
- (55) Cullmann, pp.31-32.